不動明王にみる彫像と図像の交感—正智院不動明王像を起点として—

藤岡 穰 (大阪大学)

高野山正智院に伝来した木造不動明王像は、日本における不動明王彫像の初期作例としてよく知られ、ことに重厚な量感表現や真正面を向く姿が注目されてきた。その制作年代は作品解説において、9世紀に遡る、9世紀末、10世紀といった評価がなされてきた。しかし、川野憲一は正智院像に関する専論において、空海在世時の作であり、かつ空海による感得像とみなしている。感得像か否かは別として、発表者も川野の様式理解に賛同し、制作年代は9世紀前半、おそらくは空海が没した承和2年(935)以前である可能性が高いと考える。

不動明王の儀軌は『大日経』が基本であることは言を俟たない。しかし、そこには刀と羅索を持物とし、頂髪が左肩に垂れ、一目にして諦観し(一目で本質を見抜き)、面門(眉間に水波のような皺があり、怒りを顕わに猛火を放ち、盤石にあり、肉付きよい童子の姿と説かれるだけで、表情や体勢、着衣等については触れるところがない。『大日経疏』ではこれに加えて、左目を細め、下歯で上唇の右端を噛み、下唇の左端をゆがめるといわゆる天地眼の相を説くが、やはり体勢等には触れていない。

不動明王は、インドには11世紀以降の後期密教まで確実な作例はなく、中国唐代、8世紀後半とみられる彫像4軀(1軀はシカゴ・フィールド自然史博物館蔵、3軀は西安碑林博物館蔵)が最も古いとみられる。4軀は各々欠損があつて全容は不明ながら、正面を向き、頂髪が左肩に垂れる点は共通し、残存例では右手に剣を執り、フィールド博像は蓮華座、他は岩座に坐す。両眼や口、歯牙の表現には異同があり、碑林の3軀は天衣を纏う点に特色がある。

一方、日本における不動明王は、胎蔵曼荼羅の図像を通覧すると、空海請来の現図曼荼羅やそれより古様とされる胎蔵図像、胎蔵旧図像においても、頭部を右に向け、また現図と胎蔵旧図像では腹部が左に張り出すように描かれ、それが強い規範性をもった。実際、東寺講堂像をはじめとする彫像においても、頭部を右に向ける作例が少なくない。しかしながら、その姿については儀軌に典拠があるわけでもなく、唐代の彫像と乖離していることも事実である。

そうしたなかで正智院像は正面を向く姿が注目されてきたが、制作が空海在世時に遡り、日本の不動明王彫像として現存最古だとすれば、むしろ唐代の彫像に通じる正智院像こそ空海の脳裏にあった不動明王イメージを体現している可能性がある。一方、図像において頭部を右に向け、腹部が左に張り出すのは、実は頂髪が左肩に垂れ、肉付きよい姿を図示するための方便とみなせるだろう。そして、日本においてはそうした図像が規範とされたために、不動明王はその後独自の展開をみせたと考えることができる。立体イメージの平面化にあたり、部分によって視点を変えて捉える手法は古今東西にみられるものであり、密教図像の理解にもそうした着眼が有効であることをあわせて提起したい。